

令和2年度 第10回常設展示室展示替え（報告）

令和3年1月5日（火）から1月15日（金）にかけて、7・6階常設展示室を休室し第10回常設展示室展示替えを実施した。

展示替え案については、令和元年度第2回運営専門委員会に提出し、了承された。今年度、展示替え業務の落札業者である株式会社丹青社と具体的な調整を進めていく中で、ガラスパーティションの移設が困難であることがわかり、さらには委員会に提出した案では耐震強度が維持できず、予算も想像以上にかかるため、一部内容を変更して実施した。

1. 変更（中止）内容

（1）ブースユニットの組み替え

ブースユニットをL字から二の字に変更することで、耐震強度が大幅に落ちることが判明した。また、ブースユニットの組み替えのためには、その上、ガラスパーティションの固定が建物の躯体部分に深く及んでいるため、移設後の床面の復旧が当初の見込みよりも大がかりとなり、予算内での実施が困難である。

（2）「青空教室」人形ジオラマの展示場所の変更

ジオラマの実測値に基づく調査の結果、団体来場時の導線の妨げとなることが判明したため中止する。

2. 実施内容

（1）第5ブースの展示スペースの拡張及び階段下の展示演出

階段下スペース全体を「廃墟からの出発」として一体感をもたせる展示演出を行い、ブースユニットを移動せずに、汎用性の高いのぞきケースを新設することで、展示スペースを増やした。

3. 展示状況（実施後）



（左）

終戦後の銀座四丁目付近

服部時計店（現・和光）は、昭和20年10月から27年4月まで、進駐軍のための売店・PX（Post Exchange）として接收された。

昭和20年(1945)11月頃
菊池俊吉撮影

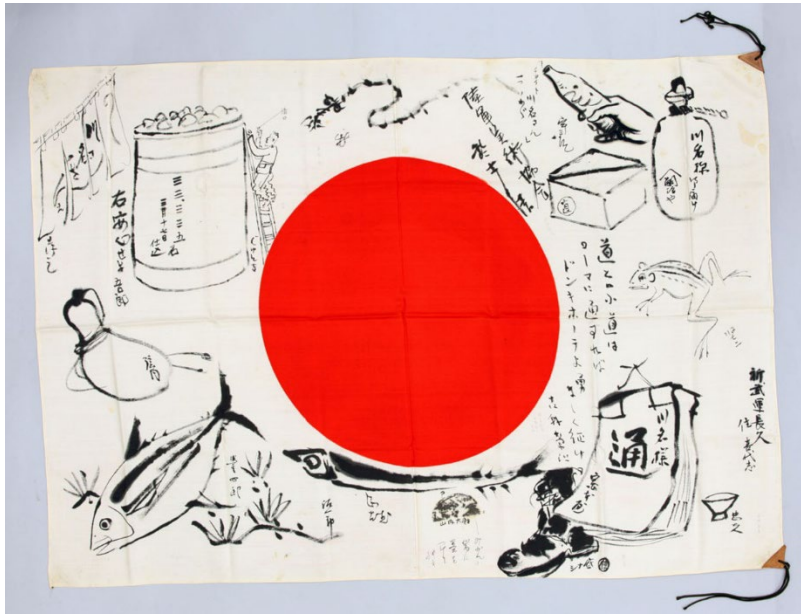
（下）

新たに「戦災復興」に関する説明を加え、漫画家の麻生豊による『銀座復興絵巻 第一集 昭和21年』（巧芸版）をパネル化して展示した。

銀座にアトリエを構えていた麻生は「在りのままの変転を、この二十一年をスタートにして書き綴って見よう」との思いから「銀座復興絵巻」を描き始め、昭和21年から36年までの間に全22巻が描かれたとされている。3枚にわたって描かれた昭和21年の銀座には、列を作って配給を待つ人々や、賑わう駅前広場の闇市の様子などが表現されている。



4. 展示替えに伴う資料交換（資料例）



7階ウォールケース
日の丸寄せ書き

洋画家・川名廣喜が召集されることを受けて、陸軍美術協会の仲間たちが揮毫した日の丸寄せ書き。藤田嗣治、宮本三郎、向井潤吉など、著名かつ当時戦争画の制作に従事していた画家たちの名前が並ぶ。
昭和19年（1944）



第2ブース
仁丹資源回収箱

資源活用のため、古金物、紙くず、ボロ（毛、綿）ゴムくず、ガラス等の廃品回収が奨励された。
戦中



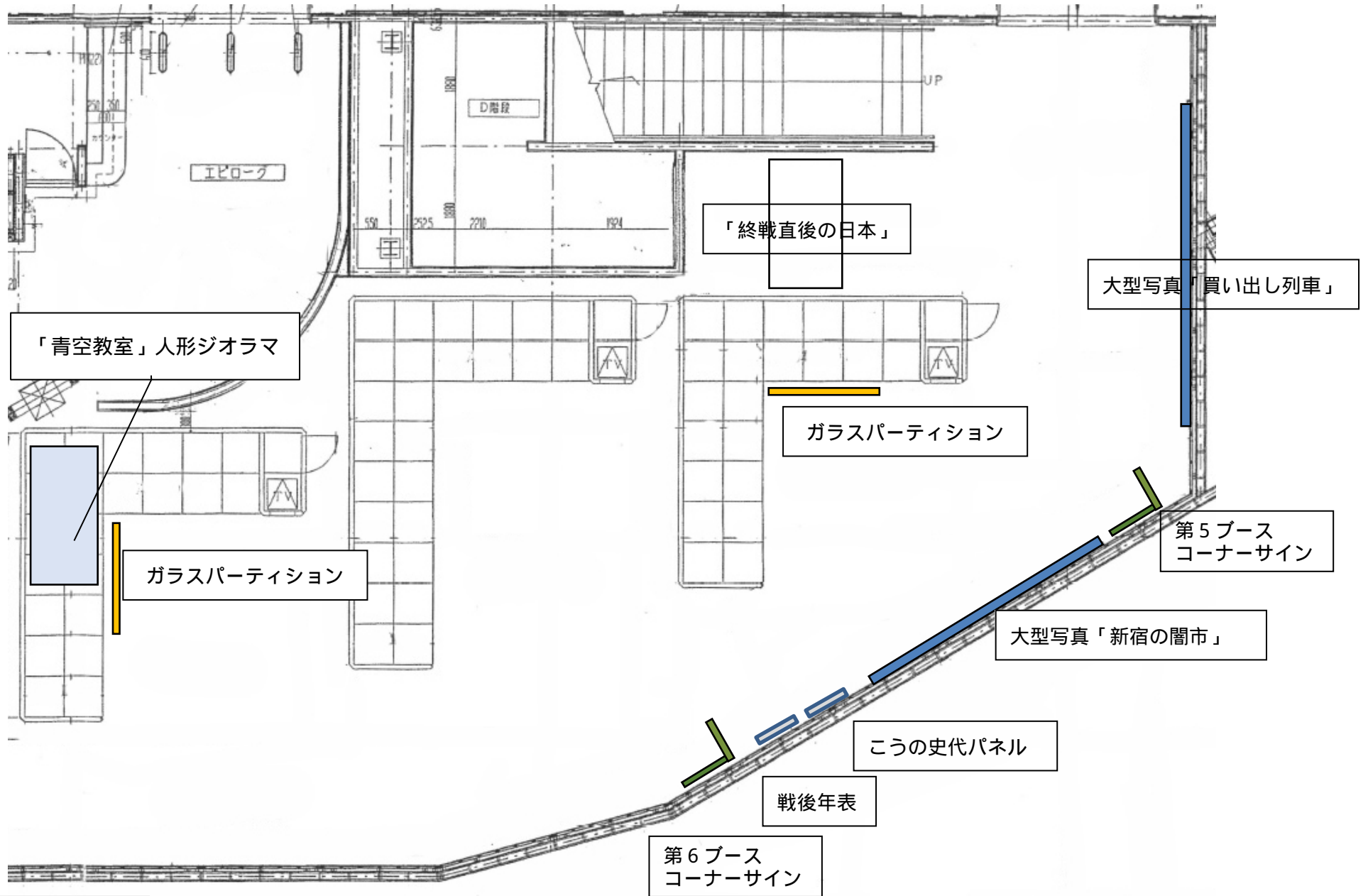
第5ブース
スケッチ「尾張町四丁目」

画：村松乙彦
日本画家の村松乙彦が終戦直後の銀座四丁目交差点を描いた作品。タイトルにある尾張町は現在の銀座を指す。服部時計店と瓦礫に埋まる地下鉄・銀座駅の入り口が描かれている。

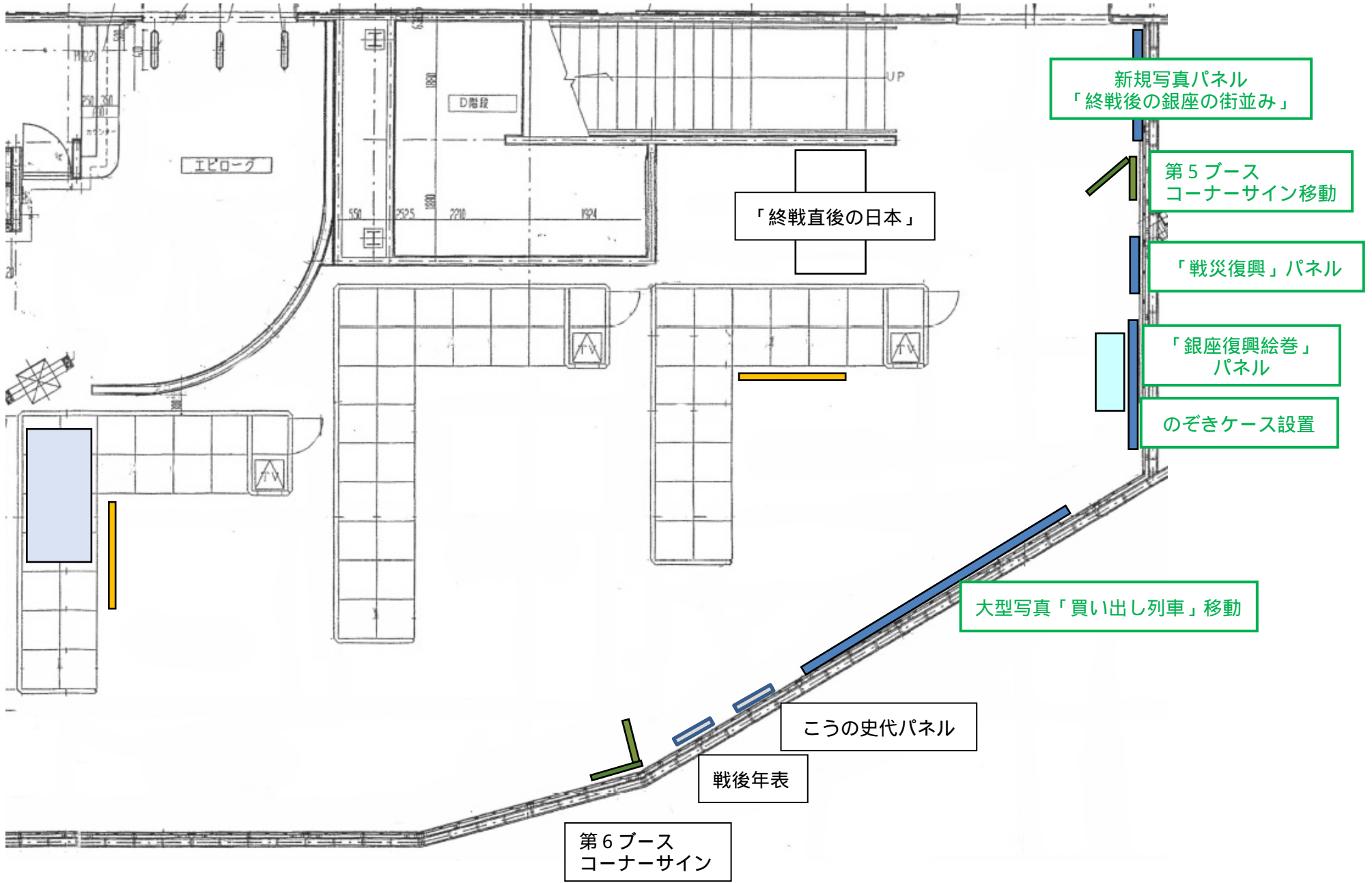
終戦直後

5. レイアウト図

変更前

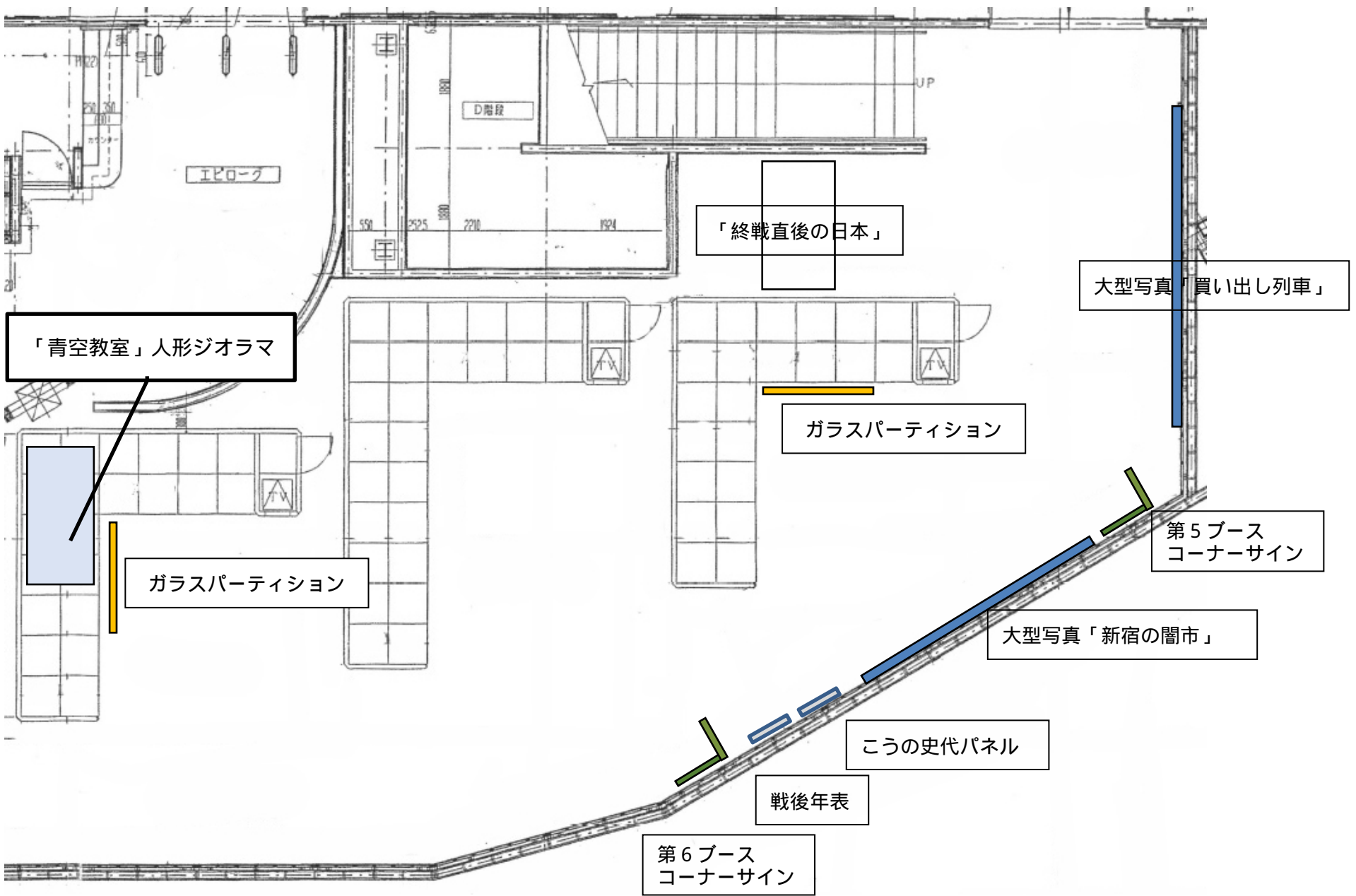


変更後



【参考】令和元年度 委員会提出案 レイアウト図

変更前



変更後

